

2015 年 3 月 1 日

桜の聖母学院高等学校
平成 26 年度 第 61 回卒業証書授与式
式辞

桜の聖母学院中学校・高等学校
校長 伊達 幸子

3 年生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。今年度は、英語科 17 名、普通科 110 名、計 127 名の皆さんが卒業証書を授与されました。

今、卒業式というこのよき日を迎えることができたことを感謝し、ここに至るまで、皆さんの努力はもとより、皆さんを支えてくださったご家族の皆様にも感謝申し上げます。高等学校に進級・入学して以来、ここに至るまで様々な出会いがあり、様々な出来事を体験したことと思います。すべてが喜ばしいことばかりでなく、苦しいことやつらいこともあったことと思います。今、それらをすべて感謝し、また新たな出発点に立てることを大きな恵みと受け止めてまた前進してまいりましょう。

今日のお話のポイントは 3 つです。第 1 に、東日本大震災から 4 年が経過しようとしている今、「復興」に関して。第 2 に、2015 年が戦後 70 年目にあたることから、「平和」について。最後に巣立っていく皆さんへのメッセージです。

(震災と祈りの心)

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災から約 4 年たち、福島市内の除染作業もかなりのペースで進み、道路は幅が広くなり、新しい家が建って、もとの美しさを取り戻しつつあるかのように思われますが、残念なことに、福島市内の様子は大きく変わってしまったようです。実際に、市街地を歩くと空き地や駐車場が増えたような気がします。また、桜の名所として市民に親しまれている信夫山の公園に近い空き地には、大型の黒いビニール袋に詰められた除染で出た土が各地から運び込まれ、フェンスよりも高く積み上げられている状況です。

新聞やテレビのニュースで、現在の福島県の放射線量や原発付近の海水のセシウムの測定値が報じられ、目にすることがあります。しかし、「廃炉作業はこれから 30~40 年かかるとみられている」と言われているという報告を読んでも、私たちには何ができるのだろうと考えると何もできない無力感を覚えてしまいます。ところが、先日、OECD（経済協力開発機構）東北スクールのこれまでの活動をまとめた映像を見る機会がありました。東北地方の中学生・高校生がこの 2 年半の間に取り組んできた活動の総まとめでした。福島県からは相馬市、

伊達市、大熊町、いわき市、二本松市、岩手県の大槌町、宮城県の気仙沼、南三陸町戸倉、女川の生徒たちが、それぞれに震災前の自然豊かな町の紹介をし、2011年3月11日を境にしてどんな状態に陥ってしまったのか、どんな気持ちを抱いたのかを語り、その後OECDスクールに出会い、生徒たちなりに荒廃した街を元気づけるにはどうしたらよいか話し合い、アイディアを実現させるため、様々な困難に突き当たりながらもそれぞれに商品開発や行動を始めて復興への一歩を踏み始めたというドキュメンタリーでした。

この映像を通して、あらためて2011年の震災を思い出し、大切な人々の命、貴重な自然を失った喪失感、絶望感を感じました。そうした中から、東北の再生のために立ち上がろうとしている若者がいるということは大きな光、希望だと感じました。

震災直後は、形あるもの、いわゆるハード面の復興が急がれてきましたが、もう一つ大切なのは心の癒しの面ではないでしょうか。たまたま福島的美術館でも東北歴史博物館、東京国立博物館でも仏像の展覧会が開催されています。

宮城県の牡鹿半島の南部の高台に震災や津波の被害を受けることなく残された仏像があります。鎌倉時代に彫られた高さ290cmの十一面観音菩薩像です。今でも地元の人々がよく訪ねては、お祈りし、親しまれているようです。厳しい自然を相手にしている漁師さんにとって、また家族にとって航海の安全を祈る対象となっているようです。自分の力が及ばないことを知るとき、自分の力を超えた方に祈らないではいけないのでしょうか。

私たちの人生の中で様々な困難や苦しみ、挫折、自分の力ではどうにもならない壁にぶつかることがあると思います。そのようなときに、私たちに与えられている選択肢は2つ。「やっても無駄だ」または「やればできるかも」。どちらを選ぶかは自分の心次第です。私の心の中に答えがあります。「うまくいくか知らないが、これをやらなければならぬとはじまらない」と主体的に考えて一歩を踏み出す勇気をもつことが復興への道ではないでしょうか。

(平和への道)

今年1月28日の紙面に、「あれ、昔どこかで見たことがあるような」と思う写真が載っていました。スティーブン・スピルバーグ監督の「シンドラのリスト」のワンシーンのようでした。大きなゲートから大勢の人々が続々と歩いて出てくる写真の説明には、「アウシュビッツ解放から70年の27日朝、収容所跡の正門から外に出る元収容者ら」＝喜田尚撮影、とありました。

今年1月24日付の日本経済新聞によると、「戦後70年間戦争をしなかったのは、国連加盟193か国のうち、8か国しかなく、アジアでは、日本以外はブ

一タンだけである」と書かれていました。

日本では今年、戦後 70 年を迎えますが、私たちは、憲法第 9 条という世界でも例のない平和憲法を有することで 70 年にわたって平和を享受することができました。

私たちは、平和というと戦争がない状態を考えるのが一般的な「平和」理解ではないかと思います。

旧約聖書で、平和は「シャローム」という語が使われています。シャロームは昔も今も、ユダヤの国では日常の挨拶に使われる言葉でした。相手の無事を喜び、健康を祝して、会うと人々は互いにシャロームとあいさつを交わすのです。

ちょっと「ごきげんよう」の挨拶に意味が似ているように思います。「ごきげんよう」も、人と出会ったときまたは別れるときに、健康を祝しまたは祈って言う挨拶の言葉」の意味です。

シャロームの意味する「平和」は次のような広い意味を持っていました。

「単に戦争がない状態を指すだけでなく、積極的に、何者によっても阻害されない個人と共同体の生活における精神的、物的、肉体的に自由で完全な充足状態を意味していました。ですからその内容は具体的には、健康であり、安全が保たれ、繁栄があり、幸福に暮らし、成功や勝利に恵まれることなど、人間生活の平安すべてが含まれていたのです。」(『聖書によむ 人生の歩み』(上)、船本弘毅)

さて、今日読まれた「使徒パウロのエフェソの教会への手紙」の冒頭は、平和の挨拶に続いて、「神から招かれた」という言葉があります。ここにいる私たちにあてはめて考えてみると、私たちもある意味で、不思議な縁でここに集められ、桜の聖母学院という共同体の一員となっています。「一つの体」とは共同体をさしています。共同体といえば、家庭、学校、地域社会、国家という単位がありますが、不思議なことに私たちは皆地球という星に生まれました。サン＝テグジュペリの言葉を借りるなら、「ぼくらは同じ地球によって運ばれる連帯責任者だ、同じ船の乗組員だ。」

遠い国や地域を引き合いにして平和を語ることはできますが、より現実的に私たちの生活の中でも、平和を保とう、平和を築いていこうとすると、努力が必要なことがあります。

たとえば、会社に入って自分の仕事でとても忙しい時に、「この仕事やってくれない？」と頼まれたり、もしかして、将来お母さんになった時、夕食の準備

の忙しい時、小さな子供たちが「ママ、お話聞いて」とか、せっかくご主人を喜ばせようと張り切って夕食を作っていたのに、ご主人は帰ってくるなり、「今日の食事なに？」。「てんぷらよ」なんて答えた瞬間、いきなり「またか」なんていわれたら、心が凍ってしまいそうになります。実は、その日、たまたまご主人は会社の社員食堂で「天ぷら定食」を食べていたなどというすれ違いが起きます。というわけで、一瞬一瞬、私はどう応えるかを問われています。

私たち一人ひとは、微力で何も平和のために貢献できないと考えがちですが、私たちが一人ひとり置かれているところで、自分に与えられた力、時間、人の話を共感しながら聴くなど、自分の才能などを進んで人のために差し出すことで平和と信頼関係が生まれます。

（巣立ってゆく皆さんへ、住み慣れたところから出て成長を続ける）

私たちの創立者聖マルグリット・ブールジョワは、フランスから大西洋を渡って、今のカナダ・モントリオールに移住しました。その時から、慣れ親しんだフランスの文化に留まるだけでなく、先住民の子どもたちを受け入れ、カナダに渡ってきた人々と出会い、互いの文化・習慣を尊重しながら、様々な人々と共に、喜びも悲しみも共にしながら、子供たち、女性たちに生きる力を育んできました。よくグローバル教育が叫ばれています。外国語をよく話せるかということが重要視されていますが、それ以前に大切な心構えとして、グローバル社会に生きる私たちは、世の中には多様な価値観があると知っていることが大切ではないでしょうか。自分の物差しで見たり考えたりすることがいつも最良の答えとは限らないのです。自分の考えだけが正しいと押し通すのではなく、社会にはいろいろな考え方があるということをいったん受け止めたうえで、自分の夢や挑戦を仲間と共に思いを一つにして進めることが大切です。

さて、この 3 年間を振り返ってみると、毎朝同じ祈り、同じ仲間たちとの勉強、同じ汗と涙を流して、かけがえのない友達ができ、先生方とも親しくなったことと思います。一昨日は、卒業アルバムをいただいて、お互いにサインしあったりしている幸せそうな光景を見にしました。自分の努力で希望の進路に近づき、充実感を覚えていることと思います。

こういう時、神様は、私たちに呼びかけられます。

「あなたは生まれ故郷、父の家を離れて、私が示す地に行きなさい。」（創世記 12:1）

つまり、快適な場所から出て行って、あなたの力、優しさを必要としている人に届けに行くように呼ばれているのです。人生の旅の途上にある私たちです。

これまでに受けた様々な恵みに感謝しつつ、これからも希望と理想をもち、謙虚に学び続け、成長していきましょう。いつも、神様が必要な力、勇気、希望をお与えくださいますようにお祈りしています。

保護者の皆様へのお礼

保護者の皆様、お子様のご卒業おめでとうございます。この 3 年間、あるいは、中学高校の 6 年間、日常の生活や学習、精神面にもご支援をいただき、誠にありがとうございました。保護者の皆様のおかげで、本日、晴れの卒業式を迎えられましたことを感謝し、巣立っていく卒業生と保護者の皆様のうえにも神様の豊かな祝福がありますようにお祈りいたします。皆様とは一旦、ここでお別れとはなりますが、精神的なつながりはこれからも続きます。在学中にいただいた変わらぬご支援を桜の聖母学院にお寄せくださいますようお願い申し上げます、式辞といたします。

参考資料

『聖書によむ 人生の歩み』(上)、船本弘毅、NHK 出版。P.127~P.129

『人間の土地』サン＝テグジュペリ、堀口大學訳、新潮文庫、昭和 51 年 2 8 刷。

P.196

日本経済新聞、2015 年 1 月 24 日付、P.17「大機小機」

朝日新聞、2015 年 1 月 28 日付、P.1, P.10